

よみがえった十字架

—— 青山学院講堂の十字架物語 ——



院長
山本与志春
YAMAMOTO Yoshitaru

2019年1月8日、青山学院中等部に待望の礼拝堂が完成し、献堂式が行われました。礼拝堂の正面には青山学院講堂から移された2メートルほどの大きな木の十字架が掲げられています。そして、青山学院講堂には新たな十字架が掲げられました。その十字架を初めて仰ぎ見たとき私は「青山学院講堂の十字架の物語を記しておきたい」と思いました。

木曾ヒノキの十字架

青山学院講堂が完成したのは1969（昭和44）年3月で、4月に中等部23期生の入学式が行われた際は、当時の中等部美術科小坂圭二教諭が制作した2メートル程ある非対称の形をした木製のスタンド式十字架が置かれていました。その後、石膏の

白い十字架が壁面に掲げられました。木製の十字架を掲げたいとの声が上がっていました。同時期に新宿通りの道路工事現場の地中から出てきて処分困っていた大量の木材を、当時の中等部笹森建美宗教主任の親戚の方がもらい受け、小坂先生が新たな十字架を制作することとなりました。その木材は、江戸時代に玉川上水から水を引くために使われ、尾張藩が管理していた木曾ヒノキです。当時、命の水を運び人々の渴きをいやした玉川上水は、多摩川の上流、羽村で水を取り、43キロをつないで四谷まで引き入れ、1653（承応2）年に完成しました。四谷からは虎ノ門まで地下水道を作り、そこから江戸城をはじめ、赤坂、芝、京橋方面へ水を分けました。この地下

水道のために使われた木材が、当時天皇家が將軍家以外使ってはならない尾張の木曾ヒノキでした。そのことから、十字架に使用した木材は江戸城、現在の皇居に引き込んだ幕府専用水道として用いられたものと思われまます。300年以上地中にあり、樹齢も加えるなら、おそらく7、800年くらい経っている木と考えられます。かつて命の水を運ぶために使われていた木が、不要なものとして捨てられました。よみがえって、人々のために死なれたイエス・キリストを思う十字架となりました。

福音書21章42節）、この聖書の言葉を思い起こします。

メタセコイアの十字架

この度、青山学院講堂の新たな十字架を制作したのは中等部の美術科簡井祥之教諭です。簡井先生は十字架の素材に中等部のシンボルツリーとなっていたメタセコイアを使用しました。太古の時代、温暖であったころ、メタセコイアは北半球の広い地域に分布していました。しかし、地球の急激な寒冷化が進んだため、様々な生物と共にその時期に絶滅したと考えられていました。

1939（昭和14）年、元大阪市立大学教授の三木茂博士は、それまで欧米の研究者がセコイアやヌマスギと考えていた植物の化石を、未

知のものであることを見抜き、ギリシャ語の「メタ」（後の・変わった）と常緑樹である「セコイア」を合わせて「メタセコイア」と名付け、1941（昭和16）年の学会に発表しました。

4年後、その植物が中国・四川省で発見され、現地を調査した米国の古生物学者ラルフ・チェイニー博士が種子を採集し育苗しました。1949（昭和24）年、チェイニー博士から昭和天皇に献呈された苗が日本に入った最初のメタセコイアと言われています。翌年、100本の苗木がアメリカから贈られました。そして挿し木で増やされた苗木のうち1本が中等部に植えられ、やがて校舎の高さを凌ぐほどに成長しました。

この植物にはたいへん興味深い特徴があります。その葉は対生葉序と言います。2枚の葉が茎を挟み対に生え、次の対は前の対と90度の角度で生えます。樹の真上から見て十字形になるので、「十字対生」とも呼ばれます。そして球果のウロコの並び方も十字対生になっており、樹全体も球果も真上から見ると十字型になっているのです。

40年間中等部を見守ってきたこの「太古の十字の樹」は残念なことに中等部の校舎建替により、樹としての生命を絶つことになりました。し

かし同時に、青山学院講堂の十字架としてよみがえったのです。制作過程とコンセプトを簡井先生から次のように解説していただきます。

「メタセコイアの真新しい木肌は、単に2本の木の板を組み合わせるだけでは前の十字架のような存在感や品格を表せるものではないことから、いくつもの部材を組み合わせる『組み木』にすることにしました。十字架本体は、断面が同じ棒を12箇所接合して作り、中心を中空スリットにする構造にしましたが、1本のメタセコイアのほとんど全てを使い切り、十字架の総重量は150kgにもなりました。この重さが一つ一つの接合箇所に負荷として大きくかかるので、この接合部分の繋ぎ合わせが制作する上で最重要かつ最大の難所です。私は、12の接合箇所を12使徒が其々の使命を果たす重荷を負って支え合っているように感じました。それらの棒を組み合わせて中央に迫り出した部分は十字架でのイエス・キリストの体を暗示するデザインになり、光源を灯すとその内側にある中空のスリットから十字の光を放つことができま



暗闇の中、光を灯すと中空と輪郭に十字架が浮かび上がる

中空のスリットから放たれる明るい十字架に加え、十字架の輪郭にはやや明るい光の十字架が二重になります。光とは絶妙なもので、周囲の明るさと中空の光量によってその表情を全く異なるものにし、私たちに様々な姿を見せてくれるのです。そして、この十字架は「光源を父なる神、光をイエスとして表し、その周囲を十二使徒によって支えられながら、人々の魂を照らす」というコンセプトで、青山学院のスクール・モットーにある『世の光』を表しています。

私は、初めて簡井先生が制作した十字架と対面した時、角ばった大きな十字架、その内側中央の迫り出した部分に際立っている人の姿、その罪の赦しを受けました。そして、死からよみがえられ希望の光として共にいてください。イエス・キリストを彷彿させる迫り出した部分のスリットの十字架は、何もなかった空間で、暗闇にも見えます。しかし、その十字架は確かに存在し、時に真つ赤な背景をにじませ血の十字架として悔い改めを求め、時に光を通して輝く十字架として希望と進むべき道を示してくれまます。新たに据えられた講堂の十字架に感謝いたします。これからも、十字架に架かられ救いをもたらされたイエス・キリストを見上げつつ歩みを進めたいと祈ります。